



【図書館の役割はヒガンバナと同じ】

「ヒガンバナという植物は、花は咲いても実はない。すると、ヒガンバナはいったいなんのために蜜を用意して、アゲハチョウたちの訪れを誘っているのだろうか。」

これは、人類学者の今西錦司が著した「曼殊沙華」(『生物レベルでの思考』所収)というエッセイの中にある一節です。

この疑問に対し、今西は、このように考察しています。

「自然に生活している生物は、つねに余裕をもった生活をしている。そして、その余裕を惜し気もなく利用したい者に利用させている。

われわれは、それをとかく無駄であるとか、浪費であるとかいうように解しがちであるけれども、自然は、そんな我利我利亡者の寄り集まりではない。ヒガンバナの花蜜は、その持ち主のためには何の役にも立たなくても、その花を訪ねてきたチョウのために役に立っておればそれでよいのだ、と。」

《文化》とは、まさにこうしたものではないでしょうか。

【あなたのポケットには、なにが入っていますか?】

7月28日、NHK総合「おはよう日本」で、第7回高校生ビジネスプラン・グランプリに於いて準グランプリを受賞した〈Fish レスキュー隊〉の活動が紹介されました。このメンバーは、神奈川県にある中高一貫校に通う2年生4名で、プラスチックゴミによる海洋汚染が深刻化している現在、砂浜に流れつくレジ袋を回収するのでは成果が薄いと、高1の7月から研究活動を始めました。その結果、魚が誤飲することなく、1年~2年で水と二酸化炭素に分解される「エネルギーフィッシュ」という環境にやさしいポリ袋を開発したのです。



レジ袋の有料化やゴミの回収などという既定路線から脱却し、ゴミは捨てられるもの、だとしたら、どうすれば魚の誤飲を防げるのか、捨てられても環境を壊さない方法はないか、という斬新な発想へとアプローチした点が高い評価を受けたのですが、これも心に「余裕」があって、はじめて為せることではないでしょうか。

この学校は進学校としても知られているのですが、コンクールや学外セミナーなど、年間約250を越える「他流試合」(学外交流活動)にも生徒たちが自主的に参加し、同年代との交流による啓発

や学びを通して視野を広げることに努めているそうです。

フランスの女性ジャーナリスト、フランソワーズ・ラポルドが、こんなことを語っています。

「フランス代表のサッカー選手やラグビー選手にインタビューしていつも感じるのは、ラグビー選手とは話が弾むのに、サッカー選手とはそうはならない。それは、小学生の頃からサッカーの英才教育を受けてきた選手たちは、サッカー以外の経験がほとんどないからだ」

青いガラス瓶の破片やカンシャク玉、犬の首輪、ネズミの死体(ホントかな?)など、ありとあらゆるものが入っているトム・ソーヤのポケットのように、どれだけたくさんの「ポケット」を備えているかということが、真剣に問われる世界に、今、お子様たちは飛びたとうとしているのです。

【余白を大切に!】

この夏休み、日野市に住む藍沙(あいさ)さんという14歳の女子中学生の個展が、東京ミッドタウンで開催されました。富士フィルムが主催する「若手写真家応援企画」にチャレンジし、63年もの歴史を誇るサロン展に最年少で選ばれたのだそうです。

藍沙さんは、小学5年生の頃からカワセミの写真を撮りはじめ、中学校に進学してからも所属する演劇部の活動の合間を縫って、多摩川に住む野鳥の撮影をしています。

よく文武両道と言って、学校では「文」を勉強、「武」を部活動と解釈していますが、解剖学者の養老孟司氏は『バカの壁』の中で「文武両道とは入・出力ということで、この両方がグルグル回らなくては意味がない」と語っています。つまり、文武両道を「勉強50%・部活動50%」と解釈するのは固定観念にすぎないのです。

人生の鳴動期でもある中学・高校時代の「時間割」は、もっと「余白」があってもいいでしょう。常に、あれもこれもと「足し算」ばかりしていないで、時には「引き算」をして、ほんとうに自分が好きなことや問題意識を持っていることにチャレンジしてみる「遊び」の時間を持つのも大切なことです。

すぐに困いたがるのは、大人の悪いワセ。ある枠組みの中での活動を継続的に強いてしまうと、かえって子どもたちは自分でものを考えることをしなくなり、ひいては「主体性」を重視する21世紀型教育に逆行することにもなりかねません。

グローバル、異文化交流、多様性、SDGs といったワードが合い言葉のように叫ばれる今日、自分の中に誰にも束縛されないオプションの部分——《文化》——を築くことこそ、21世紀のトップランナーとして生きていくお子様にとって最も大切なことではないでしょうか。そして、そのためには、お子様のすぐそばにいる私たち大人が、読書の楽しさを伝える「本の伝道師」となることが必要なのです。

【読書が与えてくれるもの】とは何か?

8月16日に司書3名で、「独立行政法人国立青少年教育振興機構」主催の子どもの読書活動推進事業～子供と本をつなぐためにできること～フォーラム【読書が与えてくれるもの】に参加して来ました。

第一部は、テーマ「読書のすすめ」浅田次郎さんの講演、第二部は、テーマ「読書で磨かれる力」角田光代さん、笑い飯・哲夫さん、川島隆太さんが登壇し、榎太一さんの司会でシンポジウムが行われました。

浅田次郎さんは、子供の頃から今の時代のゲームに熱中する子供達のように、勉強よりも読書に夢中だったそうです。それは、本の中には無限の世界が広がっていて、楽しんで本を読んでいたらとのこと。「今でも私にとって読書は娯楽です」とお話されていました。角田光代さん、笑い飯・哲夫さん、川島隆太さんも、読書に目覚めた年齢やきっかけは様々ですが、お三方ともやはり読書の魅力に気づき、読書が習慣化していったそうです。楽しくなければ、継続することは不可能です。何を読むかも含めて強要することなく、読書の楽しさをいかに子供達に伝えるかが大きな課題です。

今回のテーマである【読書が与えてくれるもの】とは何か?想像力・語彙力・思考力・自分以外の現実があることを知り、選択肢が広がる・別の世界に別の人間が生きていて、自分とは違う感情を経験できる・コミュニケーション力・社会性などたくさんのものを読書から得ることができるということでした。

興味の対象がたくさんある現代において、子供達を読書に導くのは大変難しいことですが、大人が若者に活字を読んでもらう努力を続けなければいけないと川島隆太さんがお話されていました。読解力がついて受験に役立つからなどと勧めるのではなく、とにかく読書は楽しいと知ってもらうことが最大のポイントです。それには、大人が読書を楽しんでいる姿を子供たちに見せることも大切です。コロナ禍の今、普段とは違い外出もままならない日々のなか、保護者の皆様も是非読書を楽しんで、お子さんと本についてお話されてみてはいかがでしょうか。

